



第6回 世田谷区芸術アワード「飛翔」
文学部門受賞作品

光
暈

こううん

熾野
優

つまらない映画を見た。画面が暗くなつてゆき、「終」の文字が右下に現れたところで、水が溶けて薄まったジンジャーエールを口に含んだ。客が、流れ出る排水のように劇場を去る。私は映画を見終えてやつた達成感や、柔らかい椅子に沈む倦怠感で、動けずいた。清掃員の、もういいですか、という言葉で、やつとバッグを手にした。

柔らかな床のエントランスを進み、エレベーター脇の下に向いた矢印を押す。後ろに人の気配を感じ、首だけを回して人数を数えてみると、私のほかに三人が並んでいた。何気なくショルダーバッグを前に抱える。唸るような音を立てながら、大きな箱がこの階に近づいてくるのを感じた。扉が開く。私のいる階層はほの暗く、エレベーターの中は場違いなほど光を放っていた。導かれるように私たちは乗り込んだ。奥までゆき、体を百八十度回転させて閉まる扉の方向へ体を向けると、私以外に、四人、人間がいた。四人、と頭の中で反芻させ、男女の比率を数える。女が二人、男が二人。私は耳たぶの付け根を掻いた。地上に着き、皆が遠慮がちに譲り合つて降りてゆく。ふと振り向くと、さつきまであれほど場違いに感じられたエレベーターの光は、地上においては溶け込んでいるように思えた。奥に取り付けられた鏡に映る私と目が合う。後ろで金髪をひとつ結びにして、黄緑色の眼鏡をした、自分。二度目の瞬きをしてすぐ、扉は閉まった。

映画館のある少し栄えた街は、職場と自宅の中間地点にあった。仕事を終え急行の止まらない駅から電車に乗り込み、二つ行ったところにある街で映画を見て、同じ路線の少し先で降車する。映画を見ない日はそのまま乗り続けた。もう同じ職場で働き始めて三年になるが、そのほかの駅で降りたことがない。興味もなかった。

最寄り駅は、人の乗降が激しい。十二月は特別人が多かった。駅に着いたときは、降りるといふよりも、もつていかれる。そのまま階段をくだり、気が付いたときには道を歩いている。

マンションや社宅だらけの街だ。その中に、公園やコンビニエンスストアがまばらに点在している。駅から数百メートル離れたところにも公園がある。桜の樹が植わっており、それを見上げるようにして首をまっすぐに上へと向けたキリンが、公園の中央に鎮座している。冬の季節は、枯れ葉もない寂しい樹を見つめている。

キリンの公園にびつたりと寄り添うようにして、赤いのれんを出した屋台がある。私は迷わず近づき、こんばんは、と呟いた。はいよ、と頭にバンダナを巻いた初老の店主が、愛想もなく言う。ここの店は屋台としては珍しく、持ち帰れるような容器を置いている。私は店主と自分の間でくつくつと煮える様々な具材を覗きこんだ。

か細い声で、たまご、大根、こんにゃく、と唱えて空中で指を振り、巾着を探したが見当たらなかった。湯の中を踊るようにひしめき合っている具材に目を凝らす。「巾着」

と小さく声が漏れてしまい、ああ、もうないよ、と店主がこちらを眇めて言う。これでは少なくないかと思案したが、食べるのは自分一人なのだから、量は他の料理で補えばいい。家の冷蔵庫の中身を思い出しながら、じゃあそれだけください、と俯きながら言った。

「そこのゴルフ場なくなるんだってな」

店主がトングで具材を掬いながら言ったその言葉に、私は「そうなんですか」と抑揚もなく返した。

公園の向かいには団地があり、さらにその向こう側にはゴルフ練習場がある。公園からは団地で遮られていて分からないが、駅のホームからはよく見える。両手を思い切り広げて抱えきれないであろうほどの太い鉄柱に支えられ、巨大な網が空にかかっている様子を、仕事から帰る度に眺めていた。網で空は切り取られ、閉じ込められている。か細い光を放つ星は、眼鏡をしていても数えるほどしか分からなかった。

あそこよく行くんですか、と訊くと、いや、他のお客がね、寂しがつてたから、と店主は目も合わせずに大根を優しくつかむ。私も行ったことないです、ゴルフ練習場なんて、と言うと、お客さんよく来るけど、この近くに住んでるの、と問われたので、駅を挟んで向こう側です、と住んでいるアパートの方向を指差した。店主は質問をしたにも

係わらず、うんともすんとも言わず、高いマンションが出来ねえといいなあ、と呟いた。そうですね、という言葉がすぐに浮かんだが、商売的にはうれしくないんじゃないですか、という台詞もかぶさるように思い浮かび、少し考えてどちらも口にせず、はは、と笑っておいた。

駅から家までは十分もかからない。容器が傾かないよう微調整をしながら、アパートの階段を登る。錆びてペンキが剝がれた手すりは汚くて、できるだけ触りたくない。この管理人は掃除があまり好きではないようで、一週間のうちに掃除をするのはたったの二回ほどらしい。今日は、埃と枯葉が交じり合った塊が、階段の隅に転がっている。見てみぬふりをして、一段一段背の低いヒールを乗せてゆく。三階に着いたところで、歩みは止めず、バッグのポケットに手をつっこみ、鍵を探る。自宅と実家と仕事場のロッカーの鍵が銀のリングでまとまった束を握り、三〇三号室まで無意識の内に進む。

暗がりの中で、奥の部屋の襖からうっすらと光がもれていた。おでんを靴箱の上に載せ、右手で靴を脱ぎ左手で明かりをつける。光のもれていた部屋から、がたり、と物音がしたが、すぐに静けさを取り戻した。五畳ほどの自室で服を脱ぎ、それらにブラシをかけた後上下ともジャージに着替え、台所に立つ。そうすると、あいつが居る部屋に背を向ける形になる。私は背後に気配だけを感じながら、食事の支度をする。

しばらくして、「あの」という低く小さな声に、体がわずかに跳ね上がる。振り返ると、男が開け放った襖のそばに立ち、こちらを見ていた。

「とげ抜きって、どこですか」

男は左手の薬指を顔の近くまでよせ、眉をひそめている。上下の黒いスウェットは何日も着まわしているのか、よれよれになっていた。とげ抜きですか、と答え、おでんを食べていた箸を置き、椅子から立ち上がる。私は「たしか」とひとりごとを言いながら固定電話の下にある引き出しを開け、文房具や絆創膏などが雑多に入った箱を漁る。

箱をひっくり返してまで探したがそこにはなく、ここじゃないのか、と部屋を移動し、心当たりのある場所をしらみつぶしに探す。その間男はそわそわと私の後ろをついてまわり、箱をひっくり返すたびに手元を覗き込んできた。お前も探せ、と内心思ったが、へたに私物を触って欲しくもないので、何も言えない。

結局、とげ抜きは洗面所で見つかった。姉が眉毛を抜くのに使ったのだと思う。水で洗ったのか、水垢がこびりつき白くくすんでいた。男はそれを受け取り、「ああ」とだけ言って部屋に戻っていった。私は閉じられる襖を見つめながら、頭を掻いた。

四年前、就職は思っていたよりも早く挫折した。周りの人間が必死によじ登っている

壁の前までゆき、「ああ、壁、意外と高いな」と感じただけで、それらを放棄してしまった。高校受験も大学受験もそれなりにしか闘わなかった私は、自分でも分からないほど鷹揚な心と、微かな焦りを抱いて、食い扶持を繋ぐことにした。

そうは言っても簡単にものごが運ぶわけもなく、親には「大丈夫だから」の一点張りを通し、実際はアルバイトを三つ掛け持っていた。そんな生活が一年ほど続き、親もさすがに見かねたのか、父の知り合いの派遣会社で働くことになった。掛け持ちをしていたアルバイトはどこも基本的には居心地が良かったので、派遣会社から、どこに配属されるかは分かりませんが、と言われてびくびくしていたが、自動車学校の事務に決まった時は、何故だか安心した。安心したのは、仕事の内容がまったく想像できなかつたからかもしれない。

実際に配属されてみると、正しくは、全国にある自動車学校と入校者を繋ぎ、斡旋するための会社だった。入校希望者からの電話を受け、希望の学校があれば部屋の状況を確認し、希望がなければこちらから場所を提案する。人数や日程が決まれば、その自動車学校に連絡し、引継ぎが終わればひとつの仕事は完了する。

事務仕事が初めてだった私は、最初こそ戸惑うこともあったが、気がつけば、ぼんやりする暇ができるほど仕事に慣れていった。この仕事は学生の長期休暇で忙しさが決まる

ので、繁忙期には忙殺されそうになるが、仕事が緩やかな時期はこの職場でよかったと思う。

生活が落ち着きだしたころ、私は一人暮らしを始めた。いくつかの物件を母と探し、どれも同じようだな、と思った結果、見てきた中で最もコンセントの差込口が多い家にした。今までは静岡の実家から一時間ほど時間をかけて神奈川の会社まで通っていたので、会社から五つ離れた駅の近くで部屋を借りて、三十分は長く寝ていられる事実がうれしくてたまらなかった。

その一年後、大学院を卒業した姉がこのアパートに引っ越してきた。もともと、由梨子と一緒に暮らすかもしれないから、少し大きめの部屋を借りなさい、と母に言われていたので、一年間は二DKの空間を持って余しながらも占領していた。

「照明、暗くない？」

部屋を見に来た姉の第一声は、内装でも私のことでもなく、少し弱まっていた明かりに関することだった。そうかな、と姉がお土産に買ったケーキを冷蔵庫に閉まっていると、買いいいこうか、と提案してきたので、帰りに買っていいよ、と答えると、僅かに不満そうな顔をして頷いた。

「部屋さ、どっちがいい。二つあるけど」

正方形に近い形の部屋と縦長な部屋があり、広さは正方形のほうがあったが、陽がよく入るのは縦長の部屋だった。もっぱら、仕事から帰ったら風呂に入って寝てしまうだけなので、縦長の部屋にはベッドしかなく、正方形の部屋は物置と化していた。

「宏美はどっちがいいの」

「どっちでもいいよ。まあベッドを運ぶの面倒だから、どちらかと言えば縦長の部屋かなあ」

姉は納得したようにうんうんと吹き、部屋を覗き込むと、大丈夫そう、と付け加えた。その後は家の周りを案内した。三十代くらいの若い女店主が営む小さな雑貨屋や、行けば必ず空席がある寂れた喫茶店や、前を通るだけで小さい箱の中から驚くほどアピールしてくる犬がいるペットショップなど、なるべく実用的でなく住むのが楽しみになるような場所を教えた。ここはね、と姉に教えるたび、彼女は素敵だねえ、とももとの糸目を閉じるように細めた。けれど、姉が最も興味を示したのはどこにもあるような百円ショップで、そうかこの人は情緒とか重んじない人だったな、と思いなおした。駅で切符を買うとき、電球忘れてた、と戻ろうとするので、大丈夫だよ買っておくからもう行きなつて、と無理やり送り出した。心配性で責任感が強いのは母に似たんだな、とポケットに手をつっこみ、いつもの癖で足を動かしてしまい、気が付いたときにはもう

家のドアノブを握っていた。電球は翌日買うことにした。

「今日だけ、うちに泊めてあげてね」

姉がそう言って一人の男をうちにあげたのは、二人暮らしが始まって三ヶ月が過ぎた頃だった。日曜日の夜、帰りが遅くなると聞いていた私は、一人でテレビを見ながらコーヒートを啜っていた。帰宅した姉と共に、髪が肩くらいまであり、極端に猫背な男がそのそとあがりこんできたので、私が露骨に訝しげな顔を見ると、姉はごめんごめんと左手を出して謝るポーズを見せた。男はこちらを一瞥することもなく、姉に促されるようにして彼女の部屋に入り、しばしの間ものおとだけが聞こえていたが、姉だけが無表情ですぐに出てきた。

「誰」まだ熱いコーヒーに息を吹きかけながら、私は訊ねた。ううんとね、と姉は天井を数秒間見つめ、説明すると、と言葉を選んでいる様子で、ああ、宏美にも紹介するわ、と手を叩く要領で、両手の指先を綺麗に合わせた。

姉がこのアパートに来る前のことだった。実家に帰省する際、私は向かい合っている四人がけの席に座っていた。窓と椅子の隙間に頭をすっぽりとうずめるのが好きで、知らない人に囲まれるかもしれない不安と秤にかけてもこの席を選んでしまう。

実家の最寄り駅まではあと一時間ほどで、一眠りしようか、と防寒具の上着を取り出してしていると、一組みの男女が私の前に腰掛けた。

「由梨子」

お互いの目を見つめ合いながら楽しげに話していた二人の視線が、私のその一言でこちらに注がれた。姉はさほど驚きもせず、笑顔であることに変わりはないのだが、今まで男と話していたときは違う種類の笑顔に変わっただけで、宏美じゃない、今から帰るの？ と冷静に訊ねた。男は姉と私が親しげに言葉を交わしている様子を訝しげに眺め、その後、自分の肩掛けかばんから何かを取り出そうとした。

姉が男友達と一緒にいるのは初めて見た。普段からあまり家には居ない人ではあったから、彼女がどんな人と時を過ごしているのか、最近の想像もつかなかった。男の髪は肩の辺りまで伸びていて、根元からぺたりと張り付くような質感をしている。目元も隠れていて、不衛生というか、見ているこっちが煩わしくなる。

「なあに、突然どうしたの。帰るなんてひとことも言っていなかったでしょ」と姉が言うので、「だってお姉ちゃん、もうすぐうちに引っ越してくるんですよ。お母さんが、一度戻って相談しよう、って何度も言うから、何の相談、って訊くんだけど、一向に伝わらなくて」と嘆いてみせた。

「はいはいもう分かったよ、ってなったわけだ」

「うん」

母は要領を得ない話し方をする人で、電話越しには会話が成立しないことも多かった。しかも帰って来い、と素直に言える人ではなく、私もその血は引き継いでいるのか気持ちだけはよくわかったので、こういう場合は大人しく帰省することにしていった。

「部屋って広いの？」

「けっこう広い。もともと二人分として考えていたから」

「実家にある私のベッド入る？」

「二応入るけど、押入れあるし、敷布団もあるよ」

そっかあ、でもいちいち干すのが面倒なんだよな、ちょっとさぼるとすぐ硬くなって背中が痛くなるし、と姉がベッドの有用性を語っているのを聞いていたら、男はいつの間にかあんぱんを齧っていた。駅構内の売店で売っているような、紫色の丸い書体で「つぶあんぱん」と書かれた袋を掴み、目線はまったくこちらには向けず、窓の外で変わらずに続く海岸線を見つめながら咀嚼していた。男はあんぱんの左端を齧って、次に右端を齧り、最後に真ん中を食べる、という規則的な食べ方をした。

姉は、あんぱんを食す男を眺めている私に気づき、そのとき初めて男の方を見た。

「私もつぶあん派だな」

どうどうと電車の中で食事をする人間に対する言葉がそれなのか。しかし私の知っている姉はそういう人で、きつと、今日初めて出会ったこの男も、こういう人なのだろうと憶測するには、あまりある光景だと思った。

それから現在に至るまで、男の印象は変わらずにいる。

一日だけ、と言っていた姉の言葉は撤回されるわけでもなく、なかったことにされていた。そのうち帰るだろうと思っていたが、一向にその気配はなく、家の中に男がいる状態が、段々と当たり前になっていった。風呂に入るときだけがどうしても慣れず、どうにかして欲しいと姉に言くと、男は夜九時から十一時くらいまで外出するようになった。どこでどうやって時間をつぶしているのかは知る由もない。

朝、自室から出ると、姉の部屋からは二人分の気配を感じる。たとえ中を見ていなくとも、一人ではないことは、はっきりと分かる。

私は昔から気配に敏感な子供だった。どうしてそうなったのかを考えたことがあったのだけれど、恐らく、私の部屋が居間と襖一枚の隔たりしかなかったことが原因だと思う。家族がまだ起きているうちに布団に入ると、襖の隙間から、わずかに光が漏れていた。それが目の位置に来ないよう、枕の位置をよく調節していた。家族がテレビを見ていた

り、話をしたりしていればもちろんそこに誰かがいる、というのは分かるのだが、たとえば母がひとりで家計簿をつけていても、気配だけで私にはわかった。そして、決まっていた私は、誰かの気配を感じているときはよく眠れなかった。

出勤してまず、歯を磨くようにしている。家でお湯をつけると、水がお湯になるまで結構な時間がかかる。水を出したままにして、その流れてゆく様子を見ながら、これを汲めば花の水遣りにやれるな、とか、いくつかの用途が浮かぶのだが、水を汲む容器自体を用意するのが億劫で、毎朝ぼうつと水が流れてゆくのを傍観していた。けれどある日、会社でならすぐにお湯が出る、という事実を思い出し、実際にやってみたらとうまくいったので思わず会社のトイレでやけてしまった。

口をゆすぐと、少し血が出た。いつも力を込めて磨いてしまうので、必ずと言ってよほど血がにじんでくる。歯ブラシを選ぶとき、「かため」を選ぶのがいけないのだろうか。「やわらかめ」はどうも磨いた気がしなくて使えない。

冬は長期休暇もあり、一年を通して比較的忙しい時期となる。電話を取り、ひとつの予約が完了し、少し経てば次の電話がかかってくる。気が付けば昼食の時間になっていった。

上手い具合に電話を切り上げたので、昼休憩が始まる前に喫煙所へ向かった。そこは職場と同じ階で、隔離されているかのようにひっそりとあった。全面窓ガラスのその部屋は、内側から廊下を眺める分にはなんの感慨も湧かないのだが、あちら側から見れば、中にいる人は良い見世物なのかもしれない。誰もいない喫煙所で、食事を共にできる知り合いが通るのを待ちながら煙草をくゆらせる。

すると、出津が足早に喫煙所の前を通り過ぎていった。私は慌てて煙草を消し、扉を開けて、おおい、ちょっと待って、と彼に呼びかけた。出津はあっはい、と肩を僅かに萎縮させて振り返り、私の姿を認めると、野間さんじゃないですか、と眉を下げた。

「その残念そうな顔は何。今ちょっとびくってましたでしょ」

「いや、遠くから呼ばれるとき大体怒られるときなんで。あと残念そうな顔はしてないです」

昼食？ と訊くと、その前にお手洗いに、と言うので、手でさっと払う仕草をした。あれだけ頼りなさ気な顔して結婚してるんだもんなあ、とまったく関係ないけれど、私の中にある彼の要素として一番大きな部分がすぐに浮かんでしまう。結婚している人かどうか、というのはいりどうしても三十路を前になると嫌でも気になり、常に付きまわってくる。出津は二十六歳で、私よりも一つ年下だったが、早々に結婚している、と

なると、別段結婚相手として視野に入れていたわけではないのに、頭のどこかで何かが下がる効果音のようなものすら聞こえてくるように感じる。

お待たせしました、と小走りで出津が戻ってくるころには、他の社員たちも仕事を終え、廊下がずいぶんとにぎわっている頃合だった。何がいい、と訊くと、今日は天井の気分なので食堂にしましょう、と言われ、それならここで待たなくてもよかったのか、と思いつながら承諾した。確かに天井は食堂が一番おいしい。何が食べたいのかはつきりしている人は無条件に好感が持てる、いつも思う。

食堂の喧騒の中、姉の彼氏がさ、家において気まずいんだよね、と注文した親子丼を受け取りながら言うと、出津はその言葉が耳に入っていないのか、あそこが空いてるんで座りましょう、とずんずん進んでいった。もう一度言い直す気にもならず、黙って彼の背中を追う。座った席のつくえが前にいた人の食べかすで汚れていたので、布巾をもらってくる、几帳面ですね、と出津は汚れを気にせずすぐに箸を擱んでいた、まあ癖かな、とつくえ全体を拭きながら答えた。

私は皮膚が弱くフケが出るので、何かと拭き掃除をする癖がついていた。外では他人の目もあり、最小限に抑えようという努力はできるのだが、家にひとりしていると、気づいたら頭を掻き毟っている。姉にはまだしも、あの男に嫌味な視線を送られるのは絶対に避けたかった。だからまめに掃除機をかけ、つくえの上を拭くのが習慣になっている。

親子丼を頼んだことに後悔はないのだが、天井を見ると少しばかり心が揺らぎ、変化をつけて天井をやめた自分の選択は正しかったのだろうか、と考え込んでいると、出津は勝手に近況を話し始めていた。私は自分の事を話すのは得意だったが、人の話を聞くのは苦手なので、会話が途切れない程度の相槌を打っておく。すぐに話が途切れてしまう相手もいるのだが、出津との会話は比較的すんなりと進むので、彼の話術が長けているのだろうかと思う。

話を続ける出津の口元を見ながら、こいつ歯並びが悪いな、ということも思った。前後にばらばらと生えていて、もしこの歯を私が磨いたらいつも以上に血がでるのだろうか、と妄想していると、「野間さんは？ 最近」と自分に話が振られたことに気がつく。

「私？」

「なんか、限ができてませんか」

学生の頃から徹夜などをすると限がよくできていたが、最近では、できた限がなかなか消えない。化粧でぬりこめても、隠し切れないほどに濃い。

「仕事が大変というわけじゃないんだけどね」

「心当たりは」

「んん」

さっきはぼろりと漏れた本音が、こう、面と向かって訊ねられると言いつらい心持ちになる。少し逡巡して、さっき口にした言葉を繰り返した。出津は箸をお椀にこつこつと当てながら、それなら、と言葉を繋げた。

「単純に、引越せばいいんじゃないですか」

「でも姉が後から来たわけで」

「こうして一緒に暮らすことは前から分かっていたんですよ」

「その男が来るとは聞いてない」

私の口調が少し強くなり、出津は困ったような情けないような顔をした。ご飯と具の分量に注意を払いながら会話をしていたはずが、いつのまにか白米ばかりが残ってしまった、と思った瞬間、こめかみの部分が無性に痒くなり、その衝動は煮え返る湯のように私の中で大きくなっていく。

「ちょっと席外す」

私は素早く席から離れ、食堂の隣にあるトイレへ駆け込んだ。振り返らずとも、出津が不安そうな表情で私の背中を見つめている姿が、容易に想像できた。

個室に逃げ込み、こめかみを強く押さえた後、爪を立てて掻き篦る。はあっ、と息が漏れ、掻きたいという欲が満たされた快感が得られ、すぐさま、またやってしまったのだ、と後悔がやってくる。頭からはフケがぼろぼろと零れ落ち、私と便座の間を舞って、白い床に同化して見えなくなる。頭髮も何本か抜け落ち、長い金色の髪が手に絡みついた。履いているものは下ろさず便座に座り、腹の底から溜息を吐いた。どうしてもこの症状だけは抑えきれない。精神的に圧迫されると、体の一部が痒みに襲われる。病院に行つて薬をもらっていたが、効き目は薄かった。医者も、長い目で見てね、とどこか無責任なことを言っていた。

水道で手を濡らし、そのまま髪の毛をぐぐらせるように頭皮に当て、一時的にだが冷やしてみる。こうすると幾分か楽になるので、それを何度か繰り返し、気持ちを落ち着かせ、食堂へと戻る。

出津は私が席を離れたときのまま、ぼんやりと賑わう人ごみを眺めていた。ごめんね、と私が言うまで気づかず、ああ、全然、親子丼冷めちゃったんじゃないですか、と彼ははにかんだ。きつと私を怒らせたと思っているのだろう。そうではないのだ、と弁解したい気持ちもあったが、親子丼は冷めてもいいける、と呟いた。

「僕なりに考えたんですけど」

頭の中がからっぽになりかけたところで、出津がさっきまでの話をぶり返した。

「野間さんはきつと、まあ、これは憶測なんですけど、その人に気遣いを求めているんだと思うんです」

気遣い、と小さく声に出して反復してみる。たしかに、しつくりくる。

「それで、僕は気遣いって密度だと考えているんです。密度っていう言い方が正しいのかは分からないけど、こう、ひとつの空間があるとして、そこには空気みたいに百パーセントの気遣いで満たされているんです。恐らく野間さんは家で、八十パーセントくらいの気遣いを背負っているんですよ。お姉さんやその彼氏さんは二十パーセントを振り分けてる」

相槌を打ちながら、私が席を外している間にだいぶ考えてくれたんだな、とこそばゆい気持ちになり、同時に、こんな風に誰かに何かを教わるのっていつぶりだろう、と不思議な感覚に陥っていた。出津は少し興奮した様子で、「つまり」と話の総括をした。

「解決するには、彼らにそれなりの気遣いを要求するか、もしくは」

そこで言葉をつまらせたので、私がふと顔を上げ、彼に視線を合わせた。

「そこから逃げ出すしかないと思うんです」

話し終えたにも係わらず、どこか納得していないようで、出津は自分の言葉に首をかがげた。私は、そこまで考えてくれたんだねえ、と間の抜けた声を出し、参考になるよ、

とつけたした。

「先に戻ってて。煙草買ってから戻る」

そう伝えて、私たちは別れた。一階に向かうエレベーターの中で、他人に自分を分析され、心が浮遊している感覚になりながら、彼の話をもう一度自分自身で整理しようとしてみるも、気遣い、という言葉だけが枠で囲まれたように鮮明だった。

エントランスを出て、最寄のコンビニに向かう。その途中の曲がり角で、昨日までなかった張り紙が目に入り、何気なく足を止める。張り紙には「探しています」と大きく見出しのように書かれた文字の下に、毛布にくるまった猫の写真があった。その写真の猫と少しの間見つめあい、軽く息を吸い込んで、私はその場を後にした。

何階？ と訊くと、姉は壁に取り付けられた案内板を指でなぞって、「三階」と言った。手を掲げて袖が落ち、あらわになった姉の手首は、目立つほど白かった。

年末、本家に親戚が集まる際に配るお年玉の袋を街まで買いに来た。姉は買いに行きたい店があると言うので、どこでもよくない、と私が半分投げやりな口調で言うと、ほらあの映画館が入ってるビルに雑貨屋があるでしょ、あそこに気に入ったのがあったんだけどそのとき急いで買わなかったから、と姉はまくし立てるように答え、休日に出

かける予定のなかった私は同行することにした。風の強い、寒さが肌に刺さるような日だった。

雑貨屋のフロアにたどり着き、あたりを見回すと、休日ということもあって、世代のまとまりがない、多くの人間で溢れていた。混んでる、と言うと、私たちは背が低いからね、とまるで違う方向へ飛んでゆくボールのような返事が来た。

雑貨屋の中は女性客が多く、店にある芳香剤なのか、客の放つ香水なのか見当がつかかねる匂いが鼻の奥に充満した。姉はどこに何がおいてあるのか把握していないらしく、ふらふらと赴くままに通路に入り込んで、棚にある商品に手をのばし、いろいろと試したりしていた。

「これ書きやすい」

「赤のボールペン？」

「ううん、三色ボールペン。うちにあったやつって、もうインクなくなって紙に引っかかってたよね」

「なんでもいいなら会社の備品をくすねてくるけど」

少し迷って、持っていたペンは戻し、違うものを取り出し始めた。何度かひらがなの「ゆ」を書いては、ペンを取り替えた。

「うちの実家の裏に住んでた、まちこちゃん、覚えてる？」

姉は、私の読めない筆記体で何かを書きながら言った。

「うん」

「この前子供が生まれたんだって」

「私とお姉ちゃんの間くらいの歳だったよね。今はどこに住んでるんだっけ、もうあそこじゃないでしょ」

「千葉の方だって。連絡先だけは知っててさ、写真が送られてきたのよ」

「どうだった？」

「どうって」

「え、子供？」

「んー、まだ生まれてで、ふにゃふにゃしてた」

ふうん、と自分でも興味があるのかないかわからない声が出てしまい、姉は黙ってしまった。

五本目に手を伸ばしたとき、彼女は、ごめんね、そろそろ二人で出て行くから、と呟いた。一瞬なんの話かわからなくなって返答に困ったけれど、すぐに結びつき、「ああ、別にいいんだけど、さ」と勝手に口が言っていた。

どこで知り合ったの、とか、高校までちゃんと出てる、とか、仕事してないの、とか、聞きたかったことが頭のなかを駆け巡り始めたけれど何も言えず、私は知らぬ間に、「あの人がからプレゼントとかもらったことある？」と訊ねていた。

「あるよ。日雇いのバイトしたんだって」

姉は何をもらったとは明かさなかった。

そっかあ、と試し書きで埋め尽くされた巻物のような紙を見つめながら、私は、男があの家を出ることは、姉と自分が離れることと同義で、どうにかして男だけを引き離せないものかと思案したが、姉のことも男のことも、あまりにも知らなすぎた。

私たちは合図があるわけでもなく自然と移動し、レターカードや装飾のされた封筒があるコーナーへゆき、かなり長い間、店内を物色した。姉は新年のあいさつが筆で書かれたものを、私は絵柄の気に入った猫が小判を抱えている絵のポチ袋を買った。何枚入りか数えてみると五枚入っており、配る分も五人分だったので、悩んだ挙句自分の手元に残す分も購入した。

夕暮れ時の電車は、他人に密着してしまうほど混雑していた。姉と降りる駅は同じはずなのに、しゃべるわけでもなく、何故か離れてはいけない気がして、彼女の二の腕をつかんでいた。人と人の間から垣間見える窓の外は夕暮れに赤く染まり、東の方角から

紺色の夜が迫ってきていた。電車のゆれに身を任せていると、「明日出かけて。彼と話すから」という言葉が、姉の腕から私の手のひらを通して聞こえた。

翌朝目覚めると、めずらしく先に姉が起きていた。お湯を沸かしているらしく背を向けていた。すでに焼かれた食パンがつくえの上のみにあり、これ食べていいの？ と訊くと、あーいいよもう一枚焼くから、とこちらを見ずに答えた。コーヒーをもらい、啜っていると、二人暮らしみたいだよなあ、と思いつつ隣の部屋の気配だけはしっかりと感じていた。

「いつぐらいに帰ってくればいい？」

「夕方には話し合いも終わってるはずだから」

メールするよ、と姉はコーヒーに牛乳を入れながら言った。入れすぎではないか、と思っで見ていると、どんどん色が薄まり、白に近くなっていた。それをかき混ぜながら、髪の毛はねてるよ、と私のつむじの辺りを指差した。

出かけていて、と言われてもゆく当てもなく、たまには少し離れた公園へ、と思いい立ち、駅の向こう側まで歩くことにした。

ダウンコートを着ていても外に出るとすぐに手がかじかんでくるので、はあっと息を

吹きかけてみると、乾燥した手にささくれがあった。ささくれを睨みつけながら勢いよくはがすと、血がにじみ始めたので吸うように舐めた。失敗したなと考えながらマフラーに顔をうずめて、うつむきながら、体を萎縮させて歩く。

足を動かすと頭が回転するもので、家で交わされているであろう会話の妄想が入道雲のように膨らんでゆく。二人で出てゆく、と彼女は言ったのだ。私は只、今あの家に「いない」ことだけを守ればいい。

私は彼をどう思っているのだろうか。得体の知れない嫌悪感があったが、同居人としての害はない。きっとそこが彼への評価を割り切れない原因なのではないか。いるのにないような存在。気配だけがある存在。生活にかかわりそうでかかわらない存在。

気づけば駅の裏の公園にたどり着いていた。午前中にここを訪れるのは初めてだった。明るいだけで、普段は認識していなかったところまでよく見える。

敷地自体も広いが、反対側の出口が見えるほど開けている。公園というよりも空き地と言ったほうが適切かもしれない。周りはいくつかの団地に囲まれ、円形の土地に、いくつかのベンチが設置されている。私はそのひとつにまっすぐ向かい、ハンカチを敷いて腰掛けた。頭が蒸れてしまうといけないので、ニット帽などを被ることができない。寒さで耳が千切れそうになる。

ポケットに両手をつっこみ、背もたれに体重をかけ、息を吐く。今世界中で、この一連の動作が最も似合うのは自分だ、と思いつつながら、ポケットの中をまさぐり、煙草を取り出す。強風が火をさらってゆくの、何度もつけなおしながら、やっとの思いで煙にありつく。

正面の団地を見つめながら、いままでの男の素行が蘇ってきた。あいさつはしない。家事もしない。トイレは座ってしろ、というのに立ってする。バターを冷蔵庫にしまわない。出かけたと思ったら夜中に帰ってくる。姉の手を引いて部屋に入ってゆく。姉の名前だけはつきりと呼ぶ。

いつのまにか公園には、私以外の人が入り込んでいた。ボールを追いかける子供。ベンチに座る老人。遠くを見つめる男性。視界に入り込むすべてのものを軽蔑しながら煙を吐いた。私は彼らではなく、彼らは私ではない。あたりまえの事実がどうしようもなくもどかしく、爪を立てて頭を掻き毟る。頭の芯が熱い。

いやな感触と共に手を見ると、爪の間に血が詰まっていた。強く掻き過ぎた。後頭部にじんじんとした痛みを抱えながら、苛立ちはついついゆく。今度は拳骨を作り、痒みのある部分を叩く。骨と骨がぶつかり合い響くのがわかる。このまま続ければ、何も考えなくてよくなるのではないか。

一件の着信があった。その瞬間、何故かふっと痒みが和らぎ、早いなと思いつながら見てみると、それは出津からのメールだった。

この間はえらそうなことを言ってますみません、といった内容に、これからも何でも相談にのります、と締めくくられていた。過不足ない文章で、話がうまいやつは文章もうまいのだな、と一人で納得した。返信はしないでおこう、と思った。月曜日に直接言おう。また後ろから呼びかけてやろう。子供の笑い声を遠くに聞いていると、頭の痒みは知らぬ間に消えていた。

呆けているのにも飽き始めたころ、姉から連絡があった。

「これから晩御飯の材料買ってくるから、もう帰って大丈夫だよ」

きつと私がどこか電車に乗って出かけていると思っっているのだろう。買い物から帰って私がいたら驚くのではないだろうか。時間を見ると、昼ご飯を食べ損ねていた。ベンチから立ち上がり、ハンカチをはたいた。公園から人は消えていた。

視界に違和感を覚えた私は、思わず「あれっ」と独りごちた。私はゴルフ練習場の前まで来ていた。そしていつのまにか、今まで空を覆っていた網が取り払われ、ひとつのパノラマが完成していた。切り取られていた空間は開放され、ぐんと遠くまで繋がって

いる。すこしだけ、胸が締め付けられる感覚に陥った。無性にこの気持ちを共有したくなり、私は後ろを振り返っておでん屋を探したがその姿は見当たらなかった。眼鏡を外せばより世界は広がるのだろうか。この時、コンタクトレンズを作ることを初めてまじめに考えた。

帰宅し、家の扉を開けると同時に、水が流れている音がした。出しゃばなした、と直感的に思い、靴を放るよう脱ぎ、慌てて駆け込む。すると、台所に男が立ち、こちらを覗き込むようにして見ていた。

「何してるんですか」

そう私が問うと、皿洗いですが、と彼は答えた。日常だともいう様子で彼は、スポンジを泡立てて皿を磨いていた。流れ出る水がシンクに当たり、鈍い音を響かせている。私は何度か素早く瞬きをし、その後ろ姿を眺めていた。電気がついていないことに気づき、明かりをつけると、照明はまばゆく点灯しながら私の目をくらませた。

審査委員 講評

世田谷区芸術アワード審査会委員
世田谷文学館館長

菅野昭正

あれはいつたい何者なのか。一人暮らしだった「私」のアパートに姉が同居することになってから三ヶ月、その姉が男を連れてくる。男は住みついてしまいが、どんな素性の人間なのかまるで分らない。その得体の知れなさに苛立つ「私」の日々の心の揺れぐあい、簡潔な文章できちんと書きわけられている。やがて会社の同僚から、眼のまわりに「隈」ができていと指摘されるほどにまで、苛立ちは深くなる（それが題名の由来であろう）。身近にいる他者に対しても確かな了解が成りたちにくく現代の状況に、作者の筆はそれとなく触れているようである。

外部審査委員
小説家

青野 聰

日々なにかが変わる都会のどこか。妹が先に生活をはじめた住まいに姉があとからくる。男を連れて。この三人がつくる空間が行ごとに膨らんでいく。部屋から物音が聞こえてこない姉と男の、それから言葉のやりとりが成立しない妹と男の関係。近くて遠い不思議な距離感がい。ネット時代における人と人の係わり方、といったことに「カン」がはたらくのだろう。文学の領分といってもいい。そのもとにあるのは人の「光」への感性の多様性である。「照明、暗くない？」が、部屋をみにきた姉の第一声だったということ。味わいがある。おめでとう。

外部審査委員
小説家

三田誠広

どこにもあるような日常がリアリズムで細かく描写される。ただ少し違っているのは姉と同居していることと、その姉が男を連れ込んでいること。ヒロインは見知らぬ男との同居を強いられる。すると何気ない日常がすべて、ざらついた違和感を伴ったものに変貌していく。作者はその困難な状況を声高にセンチメンタルに語るのではなく、ただの日常として淡々と語っていく。その書きぶりに作者の狙いと筆力が感じられる。

熾野 優 (おきの ゆう)

日本大学芸術学部文芸学科卒業。在学中、文芸雑誌「江古田文学」に寄稿するなど創作活動を行う。卒業後は文芸同人誌「閑窓」にて、定期的に作品を発表している。

第6回 世田谷区芸術アワード“飛翔”文学部門

世田谷区および公益財団法人せたがや文化財団では、若手アーティストの多彩な文化・芸術活動の支援を目的に芸術賞「世田谷区芸術アワード“飛翔”」を実施しています。

世田谷のそれぞれの芸術分野の特性を活かし、〈生活デザイン〉〈舞台・芸術〉〈音楽〉〈美術〉〈文学〉の5つの部門を募集し、文学部門では55件の応募がありました。下記の外部審査員による外部審査会および世田谷区芸術アワード審査会を経て、受賞者を決定しました。

外部審査員 (敬称略)

青野 聰 (小説家)

三田誠広 (小説家)

世田谷区芸術アワード審査会 (順不同、敬称略)

委員長 (公財) せたがや文化財団理事長 永井多恵子

委員 世田谷パブリックシアター芸術監督 野村萬斎

委員 音楽事業部音楽監督 池辺晋一郎

委員 世田谷美術館館長 酒井忠康

委員 世田谷文学館館長 菅野昭正

委員 世田谷区副区長 岡田 篤